2D2-05

認知修辞学の構想

The Concept of Cognitive Rhetoric

内海　彰
Akira Utsumi

電気通信大学 電気通信学部 システム工学科
Department of Systems Engineering, The University of Electro-Communications

Our research project of *cognitive rhetoric* aims at systematically exploring a cognitive mechanism underlying the relationship between stylistic technique of rhetorical figures (e.g., metaphor, simile, metonymy, irony), an interpretation or a meaning of the expression, and its effects. This paper introduces the project of cognitive rhetoric and discusses its purposes and goals, related disciplines, methodology and research topics.

1. はじめに

ことばによるコミュニケーションの最も重要な機能は，情報伝達や行動制御（言語行為）であると一般的に言われている．しかしこれが正しいとすると，なぜ人はメタファーを用いることによって受け手に感動を与えたり，ジョークで人を笑わせたり，アイロニー・皮肉を言って表面上丁寧にふるまいつつ辛辣に相手を非難したりするのに多くの時間を割くのであろうか．それは，言語が相手に情動的共感を引き起こしたり，対人関係を維持するという重要な（おそらくは最も重要な）機能を持っているからである．これらの機能の重要さは，言語が社会的関係の維持のために誕生したという仮説 [Dunbar 96] からも支持される．そしてこれらの機能・効果が最も顕著に現れるのが，上記の例で示したようなことばの修辞・文彩的技法である．このような表現技法は文学的使用に特化したものではなく，日常の意識的・無意識的な言語使用にも頻繁に観察される．

そこで，ことばの与える情動的・対人的効果がどのような認知機構によって生じるのかを明らかにすることを目的とする**認知修辞学**（cognitive rhetoric）という新たな研究分野の構築を考えている．本稿では，現時点での筆者の認知修辞学の構想について述べたい．

2. 認知修辞学の目的・ねらい

認知修辞学の目的は，**言語表現の技法・解釈・効果の三者間の相互関係を人間（受け手）の認知過程のレベルで説明する統合的理論の構築**である．この関係を図 1 に示す．

図 1 における言語表現の「技法」とは，どのように述べるか，表現するかということである．同じことを言うのにもさまざまな言い方があり，適切な言い方を選ぶことによって，意図した効果を受け手に与えることができる．例えば，女性の美しさを「彼女は美しい」と普通に言わずに，比喩を用いて「彼女はまさに牡丹のように美しい」と言ったり,「彼女ほど美しい女性はこの世の中にいるのだろうか」と問いかけることによって強調したりすることができる．本稿の認知修辞学においては，このような修辞的文彩（rhetorical figure）を表現技法として主な分析対象とする．また「技法」より幅広い用語として「文体（style）」がある．文体には，書記や統語の技法や詩における韻律，小説における語りの構造や視点，話法なども含まれる [斎藤 00]．これらの文体的技法による表現効果については，認知的側面からの研究 [Tsur 92, Semino 02] もなされている．

連絡先: utsumi@se.uec.ac.jp

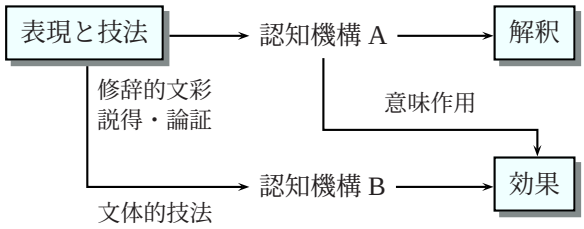

図 1: 認知修辞学のねらい

なお，日本語の「修辞」は比喩をはじめとする上記の修辞的文彩を表す語として用いられるが，英語のレトリック（rhetoric）は必ずしもこのような意味に限定されない．アリストテレスやキケロらのレトリックはコミュニケーションや効果的な説得・論証のための弁論術であり，修辞は弁論術を構成する五部門（修辞の他に，何を言うかを構想する発想，構想をどのような順番で述べていくかを検討する配置，記憶，身振りや表情などの非言語的要素も交えてどのように語るかを決める発表）の一つとして位置づけられていた．弁論術における「配置」や「発表」もある意味では言語表現の技法と考えることができ，本稿の認知修辞学も将来的にはこれらの説得技術としての技法も対象とするように拡張していきたい．（なお修辞と論証を包括したレトリックの体系化は [野内 02] を参照されたい.）弁論術としてのレトリックは中世以降次第に修辞に関する学問としての修辞学に変貌していったが，本稿の cognitive rhetoric という名称はこの意味での「レトリック」である．さらにアメリカでは，弁論術としての意味の派生として，作文技法（composition skill）のこともレトリックと呼ばれている [Wales 01].

図 1 における「解釈」は言語表現の伝達内容を表している．ここでいう伝達内容は，言語表現そのものの意味である文意だけではなく，文意をもとに語用論的推論を通じて得られる推意（話し手の意味）や発語内行為も含んでいる．後述するように，従来の修辞学では技法と効果の関係が主な研究対象であり，解釈（過程）が表現効果にどのように影響するかは扱われていない．この点が本稿の認知修辞学の大きな特徴の一つである．

言語表現の「効果」は，言語の機能（情報伝達，情動の喚起，対人関係の維持）にしたがって分類することができる．例えば，表 1 で列挙されている隠喩（metaphor）の効果のうち，「明瞭さを与える」,「具体的に説明する」,「概念の特徴群の強調」などは，情報伝達に関する効果である．一方,「快さを与える」,「快と魅力」,「愉悦を与える」などは情動の喚起に関する効果であり,「体面の保持」は対人関係の維持に関する効果

表 1: 隠喩の与える表現効果の例

- 比喩は，なによりも特に，明瞭さと快さと斬新さを文章に与える．[アリストテレス 92]
- （語の転用法が）欠乏と困窮に迫られた必要性が生み出し，その後は快と魅力とが普及させた（キケロ，[佐々木 95] より引用）．
- より大胆な装飾（愉悦を与える，情動的に動かすという働きをもった異化効果の一つ）[Lausberg 63]
- 新たな視点の提示，概念の特徴群の強調，情緒的経験の表現，体面の保持 [Cacciari 98]
- 聞き手（読み手）に強い印象を与えること．[強調]
  分かりにくいものを身近の例で具体的に説明すること．[例示]
  [野内 02]

である．筆者の認知修辞学の構想では，これらの効果のうち情報伝達に関する効果以外の，審美的・詩的効果や対人的効果を主な研究対象と考える．また効果の網羅的な調査や分析も認知修辞学の一つの研究課題と言える．

図 1 における二つの認知機構は，言語表現の解釈過程（認知機構 A）と鑑賞・審美（appreciation）過程（認知機構 B）を表している．図 1 ではこれらの二つの認知過程を区別して示しているが，これらが異なる過程であるとか，独立に処理を行っているとか主張しているわけではない．認知修辞学ではこれらの過程の相互作用として解釈や効果が生じるメカニズムを追求するのがねらいである．なお，図 1 では効果が解釈に及ぼす側面（認知機構 B から解釈への矢印）は図示していないが，これは主に解釈過程が効果に与える影響が研究対象であるためである．実際には，韻文がその意味を規定したり，単語の音や並びのリズムが意味を支えるという場合もある [赤羽 98].

3. 認知修辞学の位置づけ

本章では，認知修辞学の関連分野を概観しながら，それらの分野と認知修辞学の違いを明らかにする．

3.1 修辞学

修辞的文彩を主な研究対象として発展してきた修辞学という分野では，表現技法とその効果の関係が体系化が行われている [Lausberg 63, 野内 02]．しかし修辞学では，技法の詳細な分類や技法と効果の二者間の関係の内省的議論にとどまっており，技法と効果の関係の経験的・認知的な研究や，表現の解釈と効果の関係については扱われていない．

3.2 言語の認知科学・心理学

比喩やアイロニーをはじめとする修辞的文彩の理解・解釈の認知機構を解明する研究は，認知科学・認知心理学・認知言語学の分野で数多く行われている [Lakoff 80, Gibbs 94a, 楠見 95, Glucksberg 01, Gentner 01, 内海 01]．しかし，修辞的文彩と効果の関係までを含めた解明はほとんどなされていないのが現状である．この中には文学的メタファーの心理学的研究 [Steen 94, Gibbs 02] や認知言語学（概念メタファー）からの詩的メタファーのアプローチ [Lakoff 89] 等，認知修辞学と重なる研究も存在するが，いずれの研究も表現効果がどのように喚起されるのかという認知過程にまで踏み込んだ分析は行われていない．

3.3 文学

文学（文学理論）[土田 96] の研究では，修辞などの個々の表現技法を含む文学作品や物語における技法・解釈・効果間の関係の分析が行われている．さらに近年になって，認知的視点を導入した文学研究が行われ始めている．ここ数年だけでも，認知物語論・文学論 [Bortolussi 02, Hogan 03, Herman 03]，認知文体論 [Semino 02]，認知詩学 [Stockwell 03, Gavins 03] といった題目を掲げた研究書が相次いで出版されている．これらの研究は認知修辞学とは最も密接な関係を持つと思われる．しかし，これらの研究の多くは認知言語学の影響を大きく受けており，認知的概念を援用した個々の文学作品の記述的解釈や，物語・文学の一般的性質や構造の解明が主目的であり，個々の表現技法の認知的解明はあまり行われていない．

またロシア・フォルマリズム以降の構造主義詩学では，言語表現の意味を取捨して修辞や文体の表現形式と詩的効果の関係を記号論的に追求するという研究が行われてきた．そこで主張された前景化（foregrounding）や異化（defamiliarization）などの概念 [Shklovsky 65] は，次章で述べるように審美的効果の認知を説明する上で重要な概念であるが，構造主義詩学自体は認知的解明や解釈との相互作用は扱っていない．

3.4 語用論

言語学の新しい分野である語用論 [高原 02, 内海 03d] は，言語表現の持つ内在的意味ではなく，具体的な場面での言語使用における解釈や対人的効果を扱う点で，本稿の認知修辞学とつながりがある．しかし，認知的視点から技法と効果の関係を扱うことはほとんど行われていない．

その中で，Sperber と Wilson による関連性理論 [Sperber 95] は，認知的視点の導入を積極的に行っている語用論の理論であり，本稿で目指す認知修辞学との共通点は多い．特に文化人類学者である Sperber は関連性理論の提唱以前（例えば [Sperber 75]）から修辞的文彩の認知理論を強い関心を寄せており，そのスタンスが修辞的文彩の解釈とその詩的効果の統一的な扱いとして関連性理論に反映されている．ただし，最近こそは関連性理論の研究者によってより多くの認知的概念が導入されているが，初期の関連性理論における認知的視点は非常にマクロな関連性原則のみであり，より具体的な認知機構はあまり想定されていなかった．

3.5 既存の認知修辞学

日本において独自に認知修辞学という用語を用いた研究は筆者の知る限りないようであるが，欧米では本稿以外の異なる研究（分野）を指す名称として用いられている．

本稿の「認知修辞学」と最も近い意味では，前述した Sperber が関連性理論以前に発表した修辞的文彩の認知理論に関する論文 ‘*Rudiments de rhétorique cognitive*’（認知修辞学の基本）の題目として用いた例がある [Sperber 75].

最近では，修辞的文彩（特に詩的な文彩）を概念メタファーや概念融合から分析したり，物語や寓喩という概念と一般的認知能力の関連性を論じる Turner の一連の研究 [Lakoff 89, Turner 96, Fauconnier 02] が cognitive rhetoric と呼ばれている [Hamilton 02]．ただしこれらの認知言語学的研究では，身体性に依拠した一般的認知基盤によって詩的言語や文学を説明できる，もしくは一般的認知基盤がそもそも文学性・詩性を帯びていることを論述するのみであり，筆者の認知修辞学の目指す技法・解釈・効果間の認知的関係を解明しようとするものではない*1．なお，前述した作文技法という意味でのレトリックから，文章作成における読み書きの認知過程の研究に cognitive rhetoric という名称も使われている [Flower 90].

*1 認知言語学の理論体系を修辞的文彩や文学研究へ適用する試みは文学の認知研究の主流であるが，これには数多くの批判があるのも事実である [内海 03b].

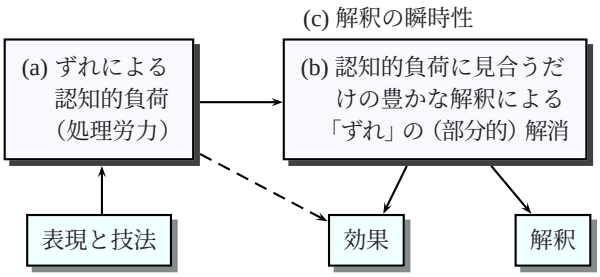

図 2: 「ずれの解消」による審美的効果の認知モデル

4. 認知修辞学の方法

一般原理としての審美的・対人的効果の認知モデルを提案し，そのモデルが個別の修辞的文彩の持つ効果をどのくらい説明可能かを明らかにするというトップダウン的アプローチと，修辞的文彩の種類に応じてどのような審美的・対人的効果があるかを分析し，その認知メカニズムを解明するボトムアップ的アプローチの両面から研究を進めていく．

審美的効果の認知の一般原理としては，図 2 や以下に示すずれの解消モデル（incongruity resolution model）[Utsumi 02a] が考えられる．

(a) 表現技法に基づいて生じる意図的なずれによって，受け手に認知的負荷（処理労力，心理的緊張）が生じる．
(b) 認知的負荷を軽減するような（部分的にずれを解消するような）豊かで多様な解釈を得ることによって表現効果が生じる．
(c) 豊かで多様な解釈は，解釈の主体が何が起こったか判断できないほど一瞬のうちに生じる．

このモデルは，実はさまざまな研究が違う形で述べている概念や理論と多くの部分で共通する．たとえば，構造主義詩学が文学性の核心概念として提案した異化 [Shklovsky 65] は，主に形式面に注目したずれとみなすことができる．また Miall ら [Miall 99] は，異化とその再解釈が文学性を構成することを実験的に示している．さらに関連性理論では，数多くの弱い推意群（a wide array of weak implicatures）を得ることによって関連性が達成されるような発話の持つ効果として詩的効果を説明している [Pilkington 00, Sperber 95]．よって個々の修辞的文彩の審美的効果がこの一般原理に従うかどうかを調べることによって普遍性を追求することが，認知修辞学の一つの大きな研究課題となる．同時に，別種の普遍性が観察されるのか，ずれの解消モデルで説明できない場合にどのような認知機構が介在するのかなども明らかにしていく必要がある．

5. 認知修辞学の研究課題

5.1 比喩

隠喩や直喩を代表とする比喩的な修辞は，あるものごとを表現するのに通常は用いないようなことばでたとえるという技法である．したがって，そこに生じるずれは主に意味的または概念的であると言える．筆者は，このようなずれによる負荷を多様な解釈によって軽減する表現のほうが審美的効果（詩的度）が高いと判断される傾向にあることを,「A は B だ」形式の隠喩を用いて実験的に示した [Utsumi 03a, 内海 03c]．現在は，このような傾向が直喩でも観察されるかを調べるとともに，隠喩と直喩の解釈過程の違いやそれによる審美的効果への影響について実験的に検討している．さらに「冷たい声」のような異なるモダリティの語を結合する共感覚比喩には一方向性仮説と呼ばれる認知原理 [楠見 95, Shen 98] が指摘されているが，これに従う表現と逸脱する表現における審美的効果の違いや,「冷たい情熱」のような対義関係にある語を結び付ける対義結合 [Gibbs 94b] や「宝石は宝石だ」といったトートロジー [Gibbs 90, Bulhof 01] の効果なども研究課題として挙げられる．

5.2 換喩・提喩

隣接性に基づく換喩や種・類に基づく提喩には，経済性や婉曲性の他に，情報の一部分に注目した表現による余情性・表現性を喚起するという効果がある [野内 02]．しかしこれらの審美的効果の認知過程についてはほとんどわかっていない [Radden 99]．ずれの解消モデルもしくは他の認知モデルによる審美的効果の解明は認知修辞学の重要課題である．

5.3 アイロニー・皮肉

アイロニーや皮肉は婉曲的に相手を非難する表現技法であるが，嫌みさなどのネガティブな情動的効果とユーモアなどのポジティブな情動的効果の両方を受け手に与える表現でもある．筆者らはさまざまな表現や状況のもとでアイロニーの与えるこれらの効果を実験的に測定し，それらの結果が暗黙的提示理論とずれの解消モデルを用いて説明可能であることを示した [大石 03]．また，アイロニーや他の婉曲表現・婉曲語法には，丁寧に振る舞ったり，親しみを示すといった対人的効果があるが，これらを生じさせる認知機構の解明も主要な課題である．さらに，アイロニーやユーモアと密接に関係する状況アイロニー [Shelley 01] をずれの解消の視点から分析することも必要である．

5.4 暗示引用

暗示引用（引喩）は他のことばや表現に言及する修辞である．アイロニーがある種の暗示引用表現 [Utsumi 00] であるとともに，ことわざ・格言，パロディなどの他の表現技法にも関係するなど重要な修辞であるにもかかわらず，暗示引用がもたらす効果についてはほとんど何もわかっていない．アイロニーとその他の暗示引用の効果の共通性や差異の分析および実験的検討が必要である．

5.5 誇張法や緩叙法

大げさに言う誇張法と控え目に言う緩叙法はいずれも強調のための修辞であるが，これらはずれを増幅させる技法と考えられる．これらの技法を比喩やアイロニーと併用したときに審美的・対人的効果にどのような影響を与えるかを，ずれの解消モデルから分析することも認知修辞学の研究課題である．

5.6 黙説法

黙説法とは話の途中で突然言いやめることであり，受け手に対して意味の産出という能動的な活動を求める修辞である [佐藤 92]．筆者ら [内海 02b] はユーモアの落ちの前にテキストの読みを中断させてそれ以降の内容を想像させることにより面白さが増すことを実験で示したが，これは間接的に黙説法の効果を調べたことに相当すると考えられる．落語などにおける「間」の効果との関係も含めて,「言わないこと」による審美的効果の認知機構を調べることは興味深い課題である．

6. おわりに

本稿では，筆者が構想している認知修辞学について，目的や位置づけ，方法論や研究課題を論じた．本稿でもふれたように，これらの研究課題のいくつかはすでに研究を開始してお

り，成果も出始めている．今後はさらなる研究を行っていくつもりである．

参考文献

[赤羽 98] 赤羽 研三：言葉と意味を考える［Ｉ］— 隠喩とイメージ, 夏目書房 (1998).

[アリストテレス 92] アリストテレス：弁論術, 岩波書店, 戸塚七郎（訳）(1992).

[Bortolussi 02] Bortolussi, M. and Dixon, P.: *Psychonarratology: Foundations for the Empirical Study of Literary Response*, Cambridge University Press (2002).

[Bulhof 01] Bulhof, J. and Gimbel, S.: Deep tautologies, *Pragmatics & Cognition*, Vol. 9, No. 2, pp.279–291 (2001).

[Cacciari 98] Cacciari, C.: Why do we speak metaphorically? Reflections on the functions of metaphor in discourse and reasoning, in Katz, A. ed., *Figurative Language and Thought*, pp.119–157, Oxford University Press (1998).

[Dunbar 96] Dunbar, R.: *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*, Faber & Faber (1996). 松浦 俊輔, 服部 清美（訳）ことばの起源：猿の毛づくろい，人のゴシップ, 青土社 (1998).

[Fauconnier 02] Fauconnier, G. and Turner, M.: *The Way We Think: Conceptual Blending and The Mind's Hidden Complexities*, Basic Books (2002).

[Flower 90] Flower, L., Stein, V., Ackerman, J., Kantz, M., McCormick, K., and Peck, W.: *Reading-to-Write: Exploring a Cognitive and Social Process*, New York: Oxford University Press (1990).

[Gavins 03] Gavins, J. and Steen, G. eds.: *Cognitive Poetics in Practice*, Routledge (2003).

[Gentner 01] Gentner, D., Holyoak, K., and Kokinov, B. eds.: *Analogical Mind: Perspectives from Cognitive Science*, MIT Press (2001).

[Gibbs 90] Gibbs, R. and McCarrell, N.: Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding colloquial tautologies, *Journal of Psycholinguistic Research*, Vol. 19, No. 2, pp. 125–145 (1990).

[Gibbs 94a] Gibbs, R.: *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press (1994).

[Gibbs 94b] Gibbs, R. and Kearney, L.: When parting is such sweet sorrow: The comprehension and appreciation of oxymora, *Journal of Psycholinguistic Research*, Vol. 23, No. 1, pp.75–89 (1994).

[Gibbs 02] Gibbs, R.: Identifying and appreciating poetic metaphor, *Journal of Literary Semantics*, Vol. 31, No. 2, pp. 101–112 (2002).

[Glucksberg 01] Glucksberg, S: *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*, Oxford University Press (2001).

[Hamilton 02] Hamilton, C. and Schneider, R.: From Iser to Turner and beyond: Reception theory meets cognitive criticism, *Style*, Vol. 36, No. 4, pp.640–658 (2002).

[Herman 03] Herman, D.: *Narrative Theory and the Cognitive Sciences*, CSLI Publications (2003).

[Hogan 03] Hogan, P.: *Cognitive Science, Literature, and the Arts*, Routledge (2003).

[楠見 95] 楠見 孝：比喩の処理過程と意味構造, 風間書房 (1995).

[Lakoff 80] Lakoff, G. and Johnson, M.: *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press (1980). 渡辺 昇一, 楠瀬 淳三, 下谷 和幸（訳）レトリックと人生, 大修館書店 (1986).

[Lakoff 89] Lakoff, G. and Turner, M.: *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, The University of Chicago Press (1989). 大堀 俊夫（訳）詩と認知, 紀伊国屋書店 (1994).

[Lausberg 63] Lausberg, H.: *Elemente der literarischen Rhetorik*, Max Hueber Verlag (1963). 萬澤 正美（訳）文学修辞学, 東京都立大学出版会 (2001).

[Miall 99] Miall, D. and Kuiken, D.: What is literariness? Three components of literary reading, *Discourse Processes*, Vol. 28, No. 2, pp.121–138 (1999).

[野内 02] 野内 良三：レトリック入門, 世界思想社 (2002).

[大石 03] 大石 昌宏, 内海 彰：アイロニーの与える効果の実験的検討：表現形式，対人的親密性，丁寧さによる影響, 日本認知科学会第 20 回大会論文集, pp.164–165 (2003).

[Pilkington 00] Pilkington, A.: *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*, John Benjamins Publishing Company (2000).

[Radden 99] Radden, G. and Kövecses, Z.: Towards a theory of metonymy, in Panther, K. and Radden, G. eds., *Metonymy in Language and Thought*, pp. 17–59, John Benjamins (1999).

[斎藤 00] 斎藤 兆史：英語の作法, 東京大学出版会 (2000).

[佐々木 95] 佐々木 健一：美学辞典, 東京大学出版会 (1995).

[佐藤 92] 佐藤 信夫：レトリック認識, 講談社学術文庫 (1992).

[Semino 02] Semino, E. and Culpeper, J.: *Cognitive Stylistics: Language and Cognition in Text Analysis*, John Benjamins (2002).

[Shelley 01] Shelley, C.: The bicoherence theory of situational irony, *Cognitive Science*, Vol. 25, No. 5, pp.775–818 (2001).

[Shen 98] Shen, Y. and Cohen, M.: How come silence is sweet but sweetness is not silent: A cognitive account of directionality in poetic synaesthesia, *Language and Literature*, Vol. 7, No. 2, pp.123–140 (1998).

[Shklovsky 65] Shklovsky, V.: Art as technique, in Lemon, L. and Reis, M. eds., *Russian Formalist Criticism: Four Essays*, pp. 3–57, University of Nebraska Press (1965). 水野 忠夫（訳）方法としての芸術, 散文の理論, せりか書房, pp.5–38 (1971).

[Sperber 75] Sperber, D.: *Rethinking Symbolism*, Cambridge Univ. Press (1975). 菅野 盾樹（訳）象徴表現とはなにか, 紀伊国屋書店 (1979).

[Sperber 95] Sperber, D. and Wilson, D.: *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*, Oxford, Basil Blackwell (1995). 内田 聖二, 中逵 俊明, 宋 南先, 田中 圭子（訳）関連性理論 — 伝達と認知 —, 研究社出版 (2000).

[Steen 94] Steen, G.: *Understanding Metaphor in Literature: An Empirical Approach*, Longman Publishing Group (1994).

[Stockwell 03] Stockwell, P.: *Cognitive Poetics: An Introduction*, Routledge (2003).

[高原 02] 高原 脩, 林 宅男, 林 礼子：プラグマティックスの展開, 勁草書房 (2002).

[土田 96] 土田 知則, 神郡 悦子, 伊藤 直哉：現代文学理論, 新曜社 (1996).

[Tsur 92] Tsur, R.: *Toward A Theory of Cognitive Poetics*, Amsterdam: North Holland (1992).

[Turner 96] Turner, M.: *The Literary Mind*, Oxford University Press (1996).

[Utsumi 00] Utsumi, A.: Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony, *Journal of Pragmatics*, Vol. 32, No. 12, pp.1777–1806 (2000).

[内海 01] 内海 彰：レトリックの認知・計算モデル：隠喩とアイロニー, 認知科学, Vol. 8, No. 4, pp.352–359 (2001).

[Utsumi 02a] Utsumi, A.: Toward a cognitive model of poetic effects in figurative language, in *Proceedings of 2002 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, WP1M2 (2002).

[内海 02b] 内海 彰：ユーモアの鑑賞過程の認知モデルに関する一考察, 人工知能学会第 16 回全国大会論文集, 1C1–08 (2002).

[Utsumi 03a] Utsumi, A.: Do emergent features influence poetic metaphor appreciation?, in *Proceedings of the Fourth International Workshop on Literature in Cognition and Computer (iwLCC2003)*, pp.1–4 (2003).

[内海 03b] 内海 彰：認知言語学や関連性理論は文学の認知研究に貢献できるか？, 小方 孝（編）, 認知システムとしての文学 —ワークショップの記録—, pp. 150–158 (2003).

[内海 03c] 内海 彰：比喩によってどのように詩的効果が喚起されるか：比喩の鑑賞過程の認知モデルに向けて, 人工知能学会第 17 回全国大会論文集, 3C1–09 (2003).

[内海 03d] 内海 彰：言外の意味のコミュニケーション：語用論概説, 人工知能学会誌, Vol. 18, No. 3, pp.337–345 (2003).

[Wales 01] Wales, K.: *A Dictionary of Stylistics, Second Edition*, Addison-Wesley (2001).